Osaka University Knowledge Archive

Title	韓国語を母語とする日本語学習者における日本語の「パラ言語情報」に関する実験音声学的研究 : 「問い返し」と「疑い」の実現および知覚の側面から
Author(s)	李, 宝瓊
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47089
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【21】

氏　　名	李（イ）　宝（ボ）　瓊（ギョン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０７９２　号
学位授与年月日	平成 19 年３月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**韓国語を母語とする日本語学習者における日本語の「パラ言語情報」に関する実験音声学的研究－「問い返し」と「疑い」の実現および知覚の側面から－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　土岐　　哲 （副査） 教　授　真田　信治　　助教授　石井　正彦

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、韓国語を母語とする日本語学習者の日本語音声による「パラ言語情報」、とりわけ「疑い」の実現と知覚に関する音響分析・知覚実験の結果を取り纏めたものである。

本論文は全８章から構成される。第１章は、本研究全体の枠組みについて述べ、「パラ言語」の捉え方ならびに日本語教育における「パラ言語情報」の位置づけに言及している。第２章では、日本語音声と韓国語音声の「パラ言語情報」に関する先行研究の中から、とくに言語学の立場で論じられた研究を概観し、韓国語のアクセントとリズム、イントネーションに関する代表的研究成果が纏められている。第３章では、本研究で用いた発話調査と知覚実験の概要を具体的に述べる。第４章では、学習者および日本語母語話者を対象に日本語音声による「問い返し」と「疑い」の発話調査と音響分析を行い、両者の音声的特徴を比較し、学習者と日本語母語話者との共通点および相違点を明らかにした。第５章では、学習者の日韓両音声による「問い返し」と「疑い」の実現による音声的特徴について考察を進め、「パラ言語情報」の音声実現における母語音声の影響を探った。第６章では、第４章および第５章の音響分析の結果に基づき、音響パラメータを操作した合成音声を用い、韓国語のソウル方言および釜山方言を各々母方言とする日本語学習者と日本語母語話者とを対象に知覚実験を行い、音声実現と知覚の両面について丹念な実証的検証を行っている。第７章は、第４章から第６章で得られた音響分析および知覚実験の結果を総括し、それらの要因を音声学的観点から探り、総合的に考察する。第８章では、本論文の成果を要約し、日本語教育への応用の可能性を探るとともに、今後の課題と展望を述べている。

本論文は、学習者と日本語母語話者の両者の間で「疑い」の「パラ言語情報」の伝達について、音声産出における音響的な相違点および知覚上の特徴が見られるかを探ることを目的としている。そして、韓国語を母語とする日本語学習者の日本語音声教育、とりわけ「疑い」の「パラ言語情報」の伝達における有用な基礎的資料を提示している。

これまでの先行研究は、日本語および韓国語のいずれにおいても当該言語の「パラ言語情報」の音声実現、あるいは知覚を別個に扱ったものが殆どであった。また、日本語教育の立場から日本語音声による「パラ言語情報」の伝達における問題点を指摘した研究はあるものの、学習者の日本語音声と母語音声を用い、音声実現と知覚の両側面から方言差も視野に入れて実証的に検討したものは見られない。「疑い」の「パラ言語情報」について、「問い返し」と

の比較を通し音声実現と知覚の両側面から双方の結果を有機的に関連付けて説明しようとした研究の嚆矢である。また、本論文では、日本語の「文節」および韓国語の「어절（語節）」が形式面および音声面で極めて近いことに注目し、音声資料における分析単位として採用している。とくに、「文節」および「어절（語節）」の両者は、発音上の区切りに基盤を置くという音声面で共通の特徴を有することから、日本語および韓国語発話において共通する韻律単位になりうることに着目した点も注目される。このように、日韓両発話の音声特徴の比較に新たな視点を導入し、独自の研究を展開している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、音響分析および知覚実験の結果から、韓国語を母語とする日本語学習者における日本語の「疑い」の「パラ言語情報」に関する音声特徴および知覚傾向について、従来にない新たな観点からの音声学的解釈を提示した。まず、「疑い」の「パラ言語情報」が付加された場合、学習者の日本語発話ではアクセント型や発話全体の Fo 形状が母語音声の影響を受けやすくなるが、この要因について、目標言語の音声によって「言語情報」を正確に表出しつつ「パラ言語情報」を表出するということは、「パラ言語情報」が付与されない単純な「言語情報」の表出より、さらにステップアップした次の段階の音声実現能力が学習者に求められることになると考察している。また、「パラ言語情報」が付与されても適切な Fo パタンを実現することが可能な超級学習者の場合、持続時間の側面では、母語話者のように実現できないという事実を踏まえ、学習者の日本語音声による「疑い」の実現においては、持続時間の側面が Fo の側面に比べ、より習得困難であるという仮説を提示している。次に、学習者による「疑い」の日本語発話と韓国語発話では、日本語母語話者の発話に比べ、最終音節の上昇幅および発話全体のピッチレンジが大きいことを突き止めた。これらの要因について、両言語のアクセントの音声的特徴の違いから説明を試みている。また、学習者の日本語発話では、「疑い」の「パラ言語情報」が加わると、発話冒頭の音節では、学習者の場合、持続時間が日本語母語話者に比べ、顕著に伸長するが、最終音節では発話冒頭とは逆に、日本語母語話者の方が最終音節長の伸長が顕著であることを解明し、理由として、韓国語のアクセントの性質と日本語のモーラの制約性を挙げ説明している。

しかしながら、本論文には方法論および解釈において問題点がなくもない。強さ（インテンシティ）やスペクトル（spectrum）など他のパラメータによる要因も看過できないであろう。また、本論文の知覚実験において「疑い」発話の原音そのものに対する被験者の正答率がやや低かったことは、実験の精度にも影響し得よう。しかしながら、これらは本研究の根本的価値を損なうほどのものではないと考えられる。従って、本論文を博士（文学）の学位に相応しいものであると認定する。